

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第68輯

中 開 遺 跡

泉佐野都市計画道路事業・関西国際空港連絡鉄道南海分岐線事業
・南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業に伴う発掘調査報告書

1 9 9 1 . 3

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第68輯

なか びらき 遺 跡
中 開

泉佐野都市計画道路事業・関西国際空港連絡鉄道南海分岐線事業
・南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業に伴う発掘調査報告書

1 9 9 1 . 3

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

序 文

泉佐野市域は今、関西国際空港の建設にともなって日毎にその姿を変えつつあります。空港連絡道路および空港連絡鉄道の建設も急ピッチで進められています。ここに報告致します泉佐野市中開遺跡は南海本線から空港連絡鉄道に分岐する部分の建設工事に先立って実施した発掘調査の成果です。

本遺跡周辺は隣接の大西遺跡や泉佐野駅前に広がる上町遺跡など中世末から近世初頭にかけての集落の跡が知られていました。今回の調査ではこの時期の集落の片鱗を見つけ出すことはできませんでしたが、自然河川や土坑を中心に、弥生時代の土器や石器がかなり見つかっており、この地の歴史に新たな一頁を加えたものと信じます。今後海岸部に近い中開遺跡周辺でも弥生時代の遺跡が広がっていることに注意をよせる必要があるようです。今回の調査成果が当地域の歴史を解明する一助となれば幸いです。

本調査を実施するにあたって、大阪府教育委員会、大阪府土木部、泉佐野市、同教育委員会、南海電気鉄道株式会社、地元自治会をはじめとする関係者各位に多くのご支援助とご協力を賜り、深く感謝をしております。今後とも当協会の事業に変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

1991年 3 月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

理事長 仁賀奈 祐吉

例 言

1. 本書は、泉佐野都市計画道路事業および関西国際空港連絡鉄道・南海分岐線事業・南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業に伴って実施された発掘調査の報告である。
2. 本調査は財団法人大阪府埋蔵文化財協会が、泉佐野市および南海電気鉄道株式会社の委託を受けて実施したものである。
3. 調査は大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府埋蔵文化財協会調査課第7班（班長藤澤真依）が担当し、技師岡村勝行が現地調査にあたった。
4. 現地調査は1990年5月7日に着手し、1991年1月25日に終了した。
5. 調査に際し、地元自治会をはじめ関係各位の協力を得た。記して感謝の意を表する。
6. 調査は国土座標第Ⅵ系を基に当協会が設定した地区割りをを用いて実施した。方位は座標北を、標高値はT.P.値を示す。
7. 本書で用いた遺構の略号は、当協会の「発掘調査規程」に基づき、その番号は種類に関わらず、通し番号を与えた。なお、本書で用いた遺構の略号は次の通りである。
OO：土坑 OR：河川 OW：井戸 OX：そのほか・不明
8. 本書で用いた色調の表現は「新版標準土色帳」6版（1986）による。
9. 調査に際し、写真、実測図を記録として残すとともに、カラースライドを作成した。また、出土遺物は写真、実測図とともに当協会調査課資料班において保管している。
10. 本書の作成、および編集は主として岡村が行い、第Ⅲ章第3節5. 石器遺物を当協会技師西村 歩が担当した。また遺構の写真撮影は調査担当者、遺物の撮影は小倉 勝が行った。なお、遺物の洗浄・実測、遺構図の作成および浄書には、当協会補助員・作業員の協力を得た。

本文目次

第I章	調査の経緯と経過	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の方法	3
第3節	調査の経過	5
第II章	地理的・歴史的環境	7
第III章	調査の成果	9
第1節	層序	9
第2節	遺構	13
1.	近世以降の遺構	13
2.	中世の遺構	17
3.	中世以前の遺構	19
第3節	遺物	22
1.	近世以降の遺物	22
2.	中世の遺物	22
3.	古代・古墳時代の遺物	24
4.	弥生時代の遺物	24
5.	石器遺物	24
第IV章	まとめ	29

挿 図 目 次

第1図	調査地位置図	1
第2図	地区割模式図	2
第3図	調査地と南海本線・分岐線の関係	3
第4図	周辺遺跡分布図	6
第5図	調査区東壁断面図	11~12
第6図	12-OW平面・断面図	13
第7図	11-OW平面・断面図	14
第8図	調査区平面・断面図	15~16
第9図	51-OW平面・断面図	18
第10図	41-OO平面・断面図	19
第11図	A区石器遺物出土の分布	21
第12図	出土遺物(その1)	23
第13図	出土遺物(その2)	24
第14図	出土遺物(その3)	26
第15図	出土遺物(その4)	27

図 版 目 次

図版1	中開遺跡航空写真	調査地(矢印)、北東から紀伊半島を望む 西から
図版2	調査区遠景	A-1・B-1区(南西から) A-2・B-2・C-2区(南西から)
図版3	A区	A-1区遺構検出状況(南西から) A-2区遺構検出状況(南西から)
図版4	調査区遠景	A-1・B-1・C-1区(北東から) B-2・C-2・D-2区(北東から)

図版 5	A-2区	A-2区北半部遺構検出状況（北西から） 31-00埋土の状況（南から）
図版 6	A区41-00	41-00埋土の状況（西から） 41-00完掘状況（北西から）
図版 7	A区	A-2区遺構検出状況（北から） 11-0W埋土の状況（北西から）
図版 8	B・C区	B-2区検出53-OR・56-0X（北から） C-2区検出53-OR（西から）
図版 9	C-2区	53-OR検出状況（北から） 53-OR埋土の状況（北西から）
図版10	C-1区	C-1区全景（北東から） 51-0W埋土の状況（北東から）
図版11	C区	C-1区52-0W（東から） C-2区（南西から）
図版12	C-1区	53-OR西壁断面（南東から） 53-OR上層埋土掘削後の状況（南東から）
図版13	D区	遺構検出状況（北東から） 同（北から）
図版14	出土遺物（1）	
図版15	出土遺物（2）	
図版16	出土遺物（3）	

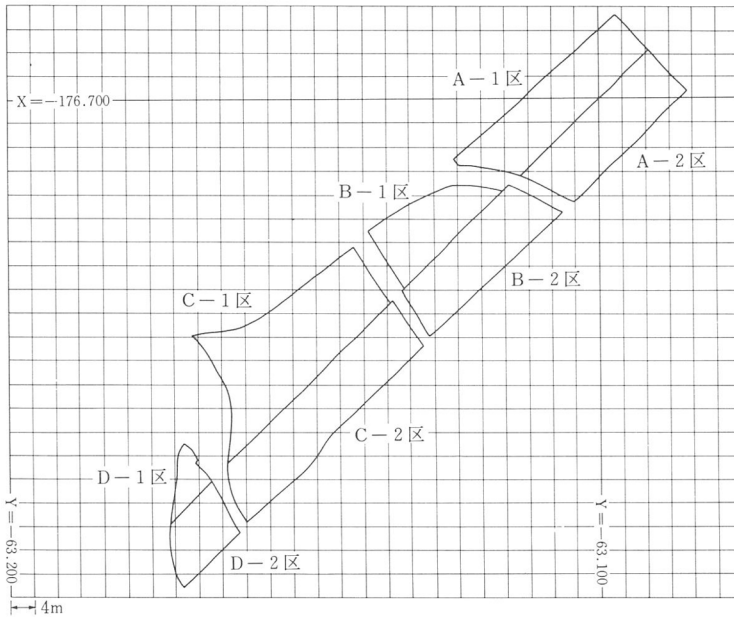
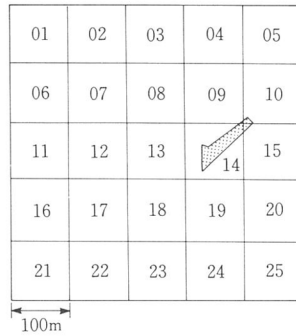
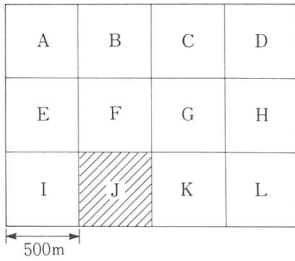
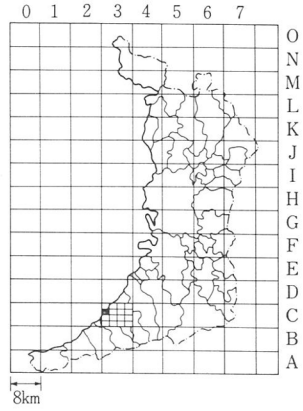
第 I 章 調査に至る経緯と経過

第 1 節 調査に至る経緯

1985年、大阪府教育委員会は空港連絡道路・空港連絡鉄道計画予定地内において埋蔵文化財分布調査を行った。この結果、今回の調査地周辺は遺物包蔵地と認定され、翌年発行の大阪府文化財分布図にはこの地域の字名をとって、「中開遺跡」と記載されている。その後、泉佐野都市計画道路事業・関西国際空港連絡鉄道・分岐線事業・南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業という一連の関西国際空港関連の事業に伴い、1990年2月から3月に泉佐野市大西2丁目から松原1丁目において16ヶ所の試掘調査が行われた。この結果、大西2丁目のうち南海本線に近い地域において、瓦器、磁器など中世を中心とした遺物および溝状の落込みが発見された。今回の調査はこの試掘調査成果を受けて、南海本線寄りの約2000㎡において実施されたものである。



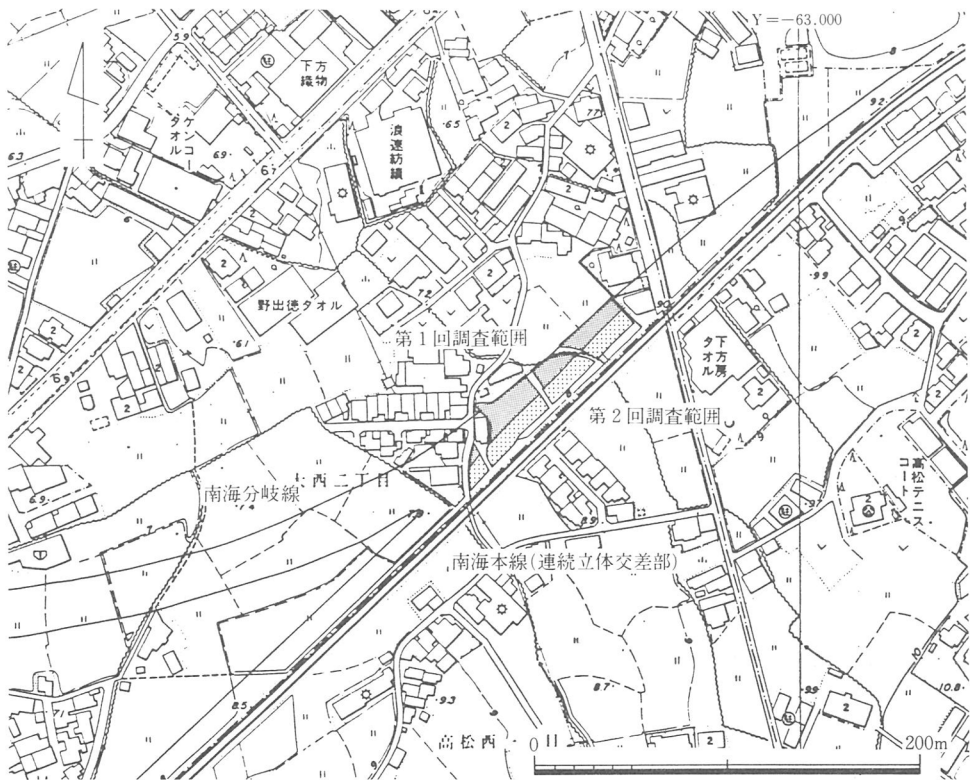
第 1 図 調査地位置図



第2図 地区割模式図

第2節 調査の方法

本文中で用いる地区名の名称とその記号、遺構の略称及び番号表示方法は例言でも示したように、当協会で定めた「発掘調査規程」によっている。まずはじめに、調査区の地区割方法については国土調査法に基づく新平面直角座標の第VI系がその基本となっている。これをもとに大阪府が作成した大阪府発行新版（昭和59年建設省国土地理院承認）1/2500地形図を12等分して、500m四方の区画を設ける。この区画にはAからLまでの記号をつけ、さらにこの一つの区画を25等分して100m四方の区画を設ける。この区画は01から25までの数字で示される。次に、一辺100mの区画を縦・横方向ともに25等分して、北あるいは西から順にAからYまでのアルファベット25文字を与える。この結果、最小の区画は4m四方となり、二文字のアルファベットで表示されることとなる。なお、アルファベットの表示は南北方向が優先である。この地区割方法により、今回の調査区は1/2500の地図では「大C-3-9」、500m区画ではJ、100m区画では09・10・14・15に位置すること



第3図 調査地と南海本線・分岐線の関係

になる。これに遺物の取り上げ単位である4 m区画を用いることによって、全ての遺構、遺物の位置が定まる。本文中では1/2500地図の記号を略し、「J14A A」というように表現することにする。

調査区は幅平均18m、長さ120mである。掘削土砂の搬出路を確保できなかったため、はじめに西側の幅9 mを調査し、その後埋め戻し、東側の調査に移った。西側の1回目の調査範囲は南海電鉄分岐線、東側の2回目の調査範囲は南海本線の立体交差部に相当する。調査区は現在使用されている3本の用水路で分断されており、4ヶ所の調査区に分けられる。北東から南西にかけてこれらをA～D区と呼称する。また、1回目と2回目の調査範囲を区別する際にはA-1、A-2区のように呼ぶことにし、細分する時には4 m区画を併用する。

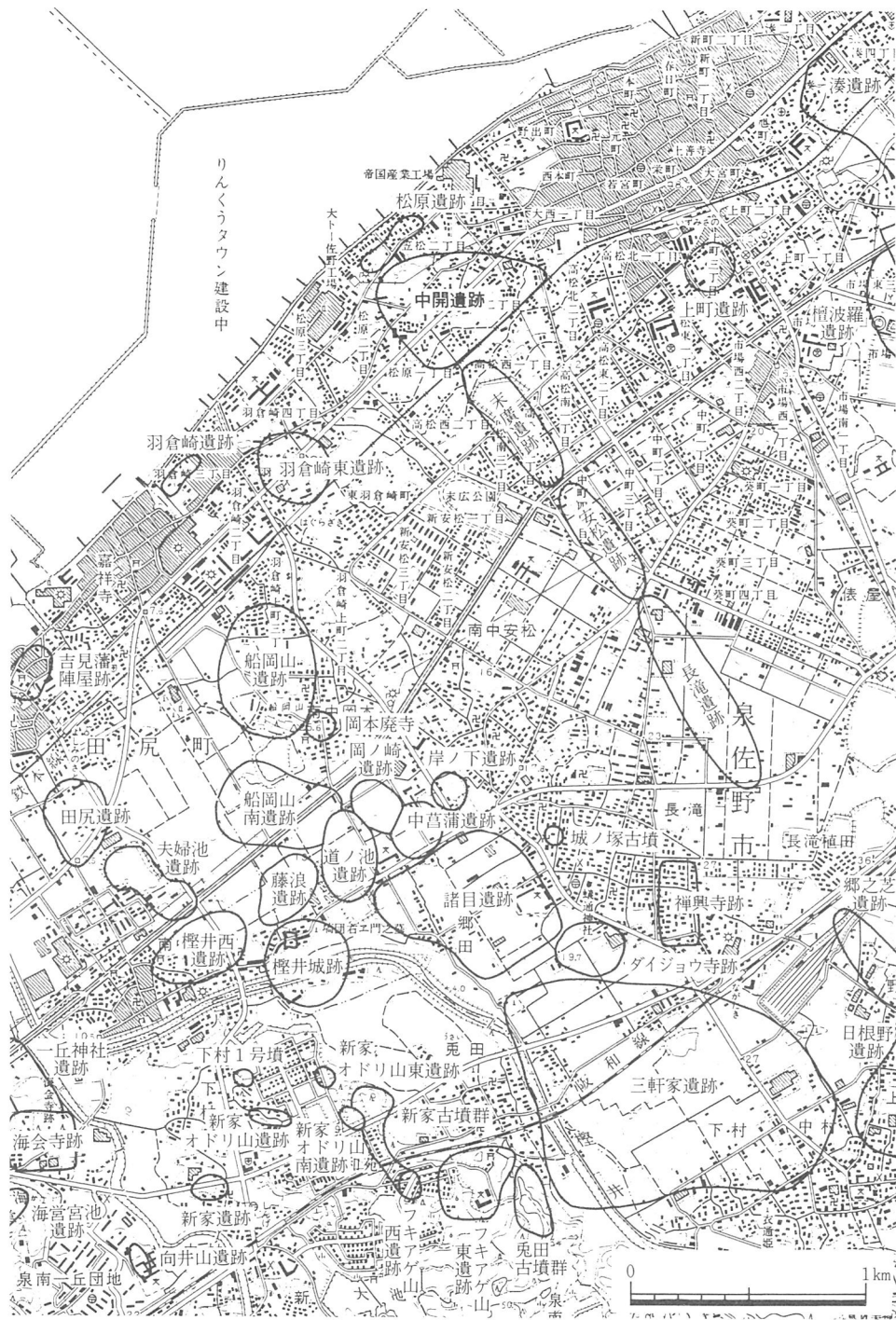
調査以前、当該地は田として利用されていた。掘削にあたっては、この耕作土（地味土）のみを重機によって掘削し、あとは人力によって掘り進めた。遺物の取り上げにはさきの4 m区画を用い、遺構の記録には最終的な平面図として1/20ならびに1/100実測図が、(株)ワールド航測コンサルタントによって作成された。遺構および調査区断面図の作成は調査担当者、調査補助員による。

現地調査は1990年5月7日に着手し翌年1月25日に終了した。

第3節 調査の経過

調査のはじめに準備工として現地の測量、フェンス張り、草刈りなどを5月7日から行い、一回目の重機掘削は6月25日から開始した。A区から順次D区に向かって重機掘削を4日間行い、これと併行して人力による遺構面清掃、および遺構掘削、測量杭設定を行った。掘削にあたっては、さきに壁際に土層観察用のトレンチを設け、層ごとに掘り下げていった。調査が進行するうちに、土層の厚み、重なりが地区によってかなり異なっていることが判明した。地山の高さは全体に中央のB・C区に向かってに徐々に低くなっており、土層の堆積はA・D区では薄く、B・C区では厚い。A区では現地表面下約20cmで地山に到達するのに対し、C区の53-ORでは最大1.4mを測った。遺構はA区に密集して検出されたので、A区の遺構掘削と他区の遺物包含層の掘り下げを同時進行で行った。A区ではサヌカイト製の石鏃を含む石器遺物がしばしば発見されたことから小さな道具で捕集に努めた。また、C区53-ORの埋土最下層から弥生土器の底部が出土し、中世だけでなく、弥生・縄文の遺物をも含む複合遺跡であることが判明した。9月13日に第一回目の航空測量を行った。この翌日から記録的な長雨に悩まされ、52-OWの壁が崩壊し、測量不可能になるなど大きな被害があった。3度の台風の後、天候が安定したのは10月も半ばになってであり、この時点で調査は1カ月の遅滞を生じることとなった。調査終盤には石器遺物が旧石器である可能性を考慮して、A区中央に幅約2m、長さ30mの範囲で粘土質の地山の削り下げ作業を行った。結果、遺物は発見されなかった。埋め戻しは41-OOだけを残し、11月2日に完了した。

第二回目の重機掘削の後、第一回目と同様に調査を進めた。遺構の分布状況、土層の重なりは基本的にはさきの調査範囲と同様であったので、この調査では先の調査で明らかにできなかった53-ORの規模、遺物包含層の時期などの問題解決に努めた。12月27日に航空測量を行った。翌年から遺構平面・断面図などを補足し、1月11日に記録調査を終了した。その後調査区の埋め戻し、プレハブの撤収を1月25日までかけて行った。



第4図 周辺遺跡分布図

第II章 地理的・歴史的環境

中開遺跡のある泉佐野市は大阪府の南部に位置する。市域は北西から南東へ長く伸び、北西部は大阪湾に、南東部は海拔100～500mの和泉山脈の稜線を境にして和歌山県と接する。和泉山脈の前面には丘陵地帯が広がっており、この丘陵を縫うようにして中小の河川が流れ、市域の北西部に河岸段丘を形成している。沖積平野はこれらの河川沿いにわずかにみられ、遺跡はその狭小な沖積平野を望む河岸段丘の縁辺部を中心にしてみられる。このうち、中開遺跡は佐野川と見出川に挟まれた沖積段丘面あるいは低地に立地している。この地域は現在の海岸線から約500m離れ、現在の地番では泉佐野市大西2丁目から松原1丁目にあたる。

中開遺跡周辺において旧石器時代から縄文時代中期にかけて、遺跡として認められる明確な資料は乏しいが、東方2kmに位置する壇波羅遺跡からはナイフ形石器が出土している。縄文時代後期から晩期にかけての遺跡としては、南方3kmに榎井川沿いの三軒屋遺跡があり、遺構・遺物が数多く検出された。晩期の後半には三軒屋遺跡のほか、見出川流域の貝田遺跡、田尻川流域の船岡山遺跡が知られており、船岡山遺跡と三軒屋遺跡では弥生前期の土器と共伴して出土している。弥生時代中・後期には佐野川、榎井川に沿って数多くの集落が営まれる。佐野川流域の壇波羅遺跡（Ⅱ様式）、井原の里遺跡（Ⅱ様式）、榎井川流域の三軒屋遺跡（Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ様式）、榎井西遺跡（Ⅲ様式）、湊遺跡（Ⅴ様式）、田尻川流域では船岡山遺跡（Ⅱ様式）、田尻遺跡（Ⅴ様式）が知られている。三軒屋遺跡を除くと、他の集落はいずれも継続性に欠け、小規模なものが多いようである。また、榎井西遺跡では方形周溝墓が検出されている。

泉佐野市内では前・中期の古墳は確認されていない。後期には榎井川を見おろすようにして兎田古墳群が営まれる。また、三軒屋遺跡では後期の多量の円筒埴輪が出土していることから、後世の開発で破壊された多くの古墳がもとは存在したことが考えられる。

長滝にある禅興寺や泉南市の海会寺は白鳳期に築造された寺院として著名であり、長滝周辺には整然とした条里遺構が存在する。また、付近には日根郡衙の存在した可能性も指摘されている。律令制下の集落は湊遺跡（奈良・平安）、上之郷遺跡（平安）、三軒屋遺跡（奈良）などが確認されている。このうち、湊遺跡では平安時代中期の掘立柱建物が多数検出されている。

平安後期から鎌倉時代にかけては諸権門の荘園が立荘された。なかでも守護細川氏、本所九条家、紀州根来衆の支配に対抗した日根荘は著名である。遅くとも13世紀中頃には成立していたと考えられ、この荘園の歴史は文献歴史、歴史地理、考古学などから総合的に研究が進められている。このほかに長滝、鶴原、佐野、井原の里、入り山田の各荘園も12～13世紀には立荘される。これらの荘園は室町時代後期まで続き、この頃には熊野街道沿いに貝田、樫井、市場が成立した。中開遺跡の北東約700mの上町遺跡では15世紀代の方形の溝で区画された屋敷地が見つまっている。また、海岸部では佐野などの集落が成立し、この時期にはほぼ現在の街なみを形成していたと考えられる。

参考文献

泉佐野市教育委員会「夫婦池遺跡発掘調査報告」『泉佐野市埋蔵文化財調査報告Ⅷ』1986

泉佐野市教育委員会「湊遺跡」『泉佐野市埋蔵文化財調査報告ⅩⅤ』1989

(財)大阪府埋蔵文化財協会「羽倉崎遺跡」『(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第38輯』

1989

(財)大阪府埋蔵文化財協会「上町遺跡」『(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第57輯』1990

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 層序 (第5・8図)

調査区の土層の堆積状況は第8図に示すように、中央が厚く、両端は薄い。これは当該地が53-OR周辺に発達した水成層にみられるように、人間の開発行為以前から中央が浅くくぼんだ谷状の地形となっていたことに影響されたものである。この浅い谷状の地形に供給された土砂は、長い年月継続されて耕作されたものと考えられ、その耕作単位を示す土層がB・C区では3～4枚認めることができた。出土土器から各層の時間幅を考慮し、調査区の層序を第Ⅰ～Ⅷ層に分類した。以下、各土層の特徴について記す。

第Ⅰ層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂質シルト。現代耕作土の床土にあたるもので、第Ⅰ-1、第Ⅰ-2層の二層に分けられる。B～D区に分布する。本層からは近世以降の磁器、蛸壺、土錘に混じって、中世の土器、サヌカイト・フレイクが出土した。

第Ⅱ層：暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂質シルト。B～C区に分布し、第Ⅱ-1層、第Ⅱ-2層の二層に分けられる。両者には粗砂が部分的に介在している。本層からの最も新しい遺物は17世紀頃の唐津窯系などの磁器であり、ほかに土錘、蛸壺、瓦器、須恵器、土師器が出土した。おおむね近世の時期に比定される。

第Ⅲ層：灰黄褐色(10YR5/2)細砂質シルト。A～C区に分布する。A・B区では直接地山を覆っている。12～15世紀の瓦器、瓦質羽釜、磁器、サヌカイト・フレイクを含む。特にA区では薄く残存した本層から石器遺物が比較的多く出土した。また、53-ORを覆う本層からは弥生土器が出土している。近世の遺物を含まず、中世の時期の包含層であると考えている。

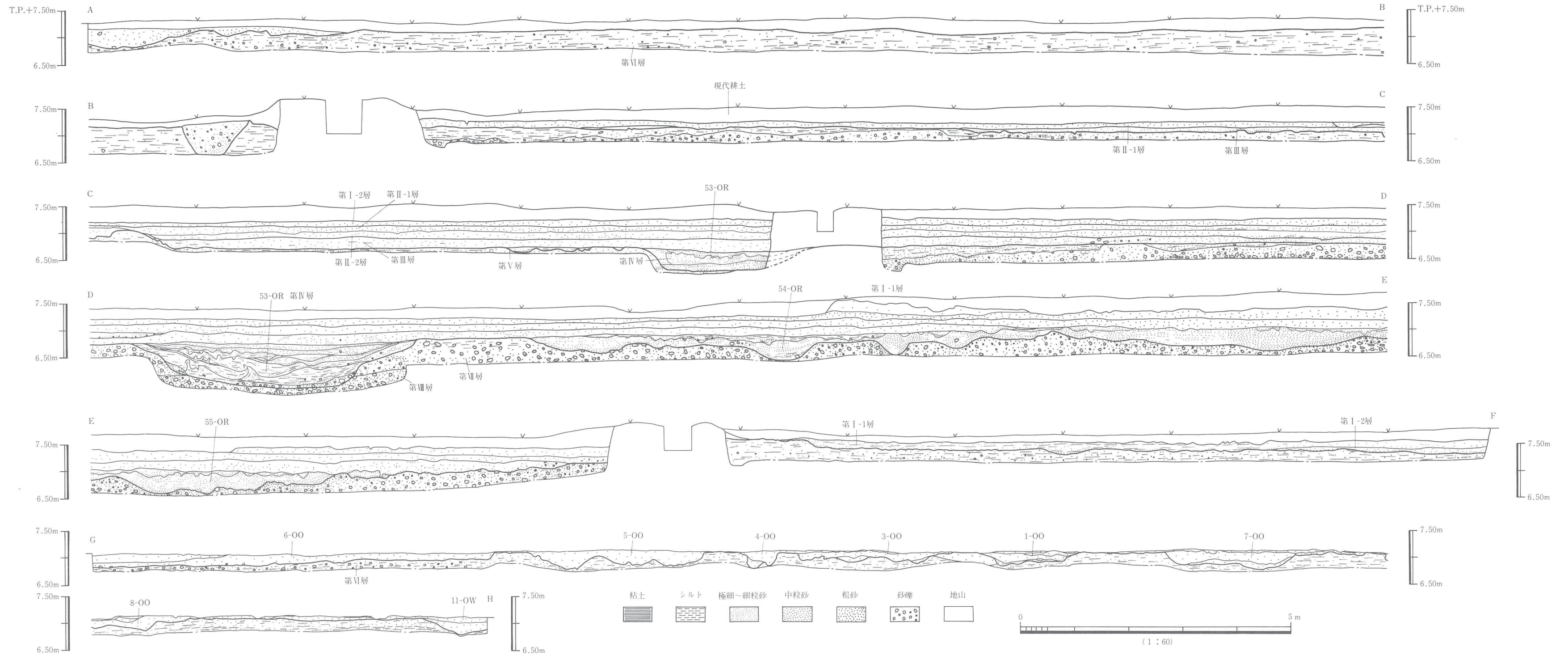
第Ⅳ層：灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂質シルト～灰色(7.5Y6/1)砂礫。53-ORの埋土である。上層から中粒砂、細粒砂、極細粒砂と移行し、最下層は砂礫である。最上層以外は水成層の顕著な特徴がみられる。最下層からは弥生時代中期の土器が数点出土した。

第Ⅴ層：灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂。C区に分布し、水成層の特徴がみられる。遺物を全く含まない。第Ⅶ層を一部切っている。土層の特徴からある時期に水の侵食作用を受けた第Ⅶ層が再堆積したものと考えている。このうち、比較的大きな下刻をうけて流路状に検出されたのが、54-OR、55-ORである。

第Ⅵ層：黄灰色（2.5Y6/1）粘土質シルト。A・B区に分布する。下部には部分的に礫が混じる。A区ではこの土の採取を目的としたものと思われる不定形な土坑が多くみられた。また、A区では上層で石器遺物が多く出土したことから幅2m、長さ30m、深さ30cmにわたってこの層を調査したが遺物は検出されなかった。今回の調査ではこの層までを調査の対象とした。

第Ⅶ層：黄褐色（10Y R5/8）礫質細粒砂。C区に分布する。偽礫と化した和泉砂岩を多く含む。第Ⅵ層との境界は部分によっては不明確であった。

第Ⅷ層：明青灰色（10B G7/1）礫質粗粒砂。偽礫化していない和泉砂岩を多く含む。部分的な観察では本層に10cm前後の水平堆積の単位が認められた。



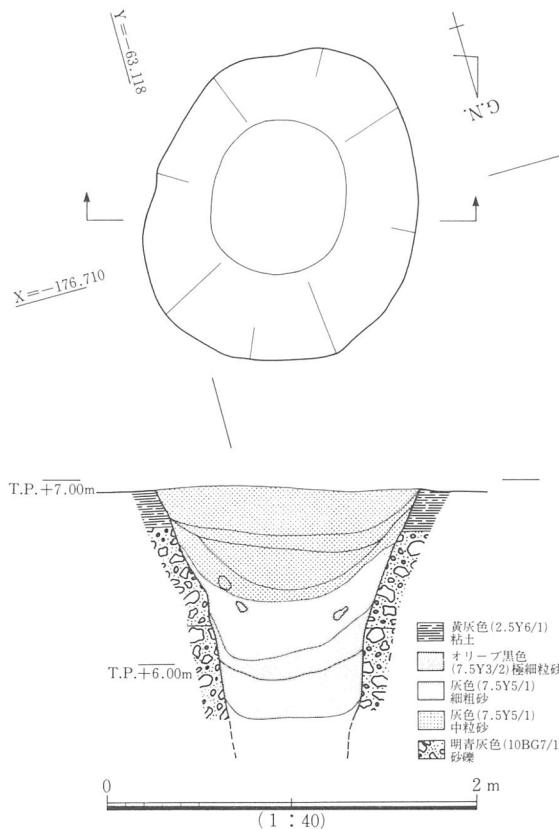
第5図 調査区東壁断面図

第2節 遺構

今回の調査では、井戸、土坑、溝、自然河川などが検出された。これらの遺構に含まれる遺物は少なく、遺物から個々の遺構を時期判定することは極めて困難であった。遺構に含まれる最も新しい遺物はその遺構の時期の下限を示すという考古学の基本に則れば、ここに報告する各遺構は下限を提示できるだけで、特定できないものが大半である。ただ、調査地の土層の形成時期の中心を第I層が近世以降、第II層が近世、第III層が中世と現在考えているので、この前提に従って各遺構を分類し報告することにする。

1. 近世以降の遺構（第8図、図版3・5）

A区に密集して検出した土坑は、41-00を除けばほぼ同様な特徴がみられる。埋土の点では灰褐色系の砂質シルトの中に、地山に由来する黄褐色系粘質シルトがブロック状に多く混入している。また、その平面形はいずれも不定形であり、深さは10~20cmと浅い。

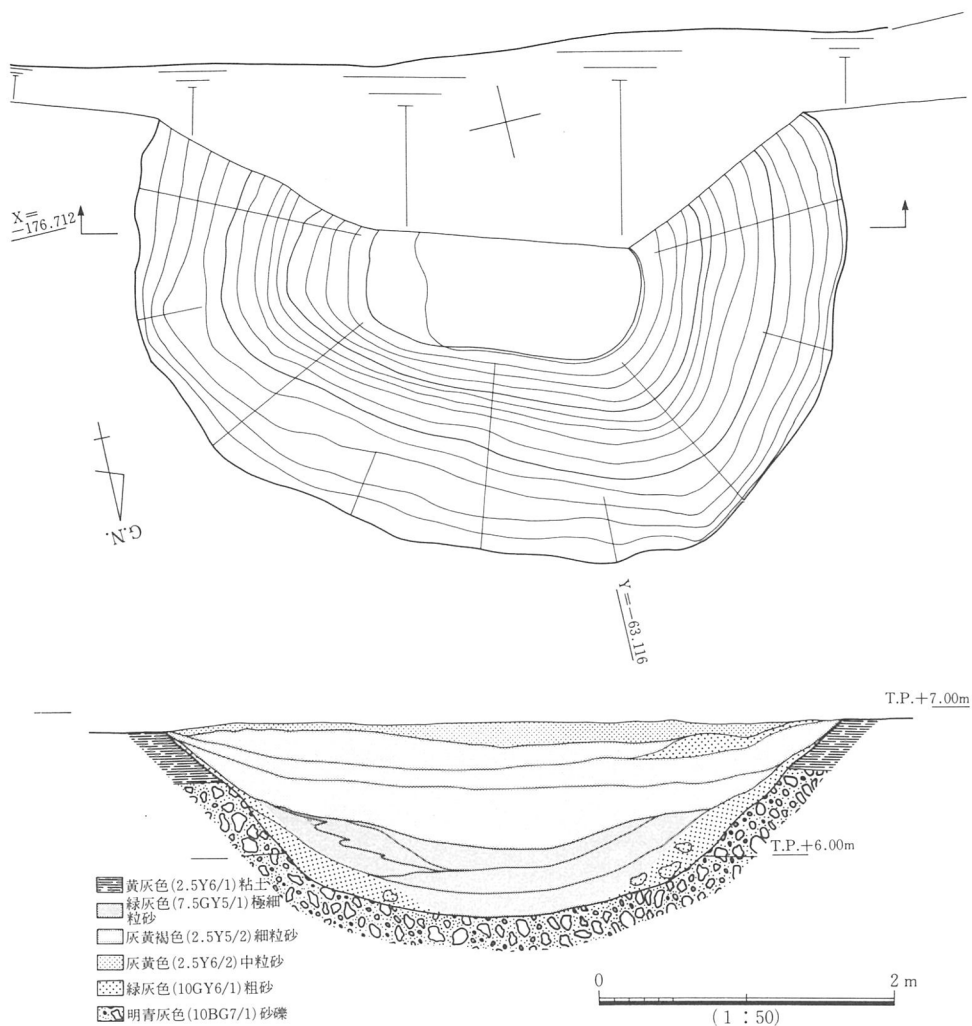


第6図 12-OW平面・断面図

出土遺物には磁器、土師器、蛸壺、土錘（第12図-6）、サヌカイト製石器遺物である。B区にはみられない点から用水路までの土地区画に規制されたものかも知れない。遺構周辺の地山は粘土質であり、土取り用のものであろうか。

12-OW（第6図）

A区西方で11-OWに近接して検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.64m、短径1.44mをはかる。安全性を考慮して、深さ1.4mまでで掘削を止めた。埋土はいずれも水成層の特徴がみられ、自然堆積している。上層から灰色中粒砂、灰色細粒砂、灰色極細粒砂、オリーブ黒色極細粒砂の順である。細粒砂中より近世磁器の細片が出土した。



第7図 11-OW平面・断面図

11-OW (第7図, 図版7下)

A区西方で検出した。遺構の一部は調査区外にある。平面形は楕円形で長径4.80m、短径3.50m、深さ1.30mをはかる。埋土の状況から判断すると、人為的な埋め戻しではなく、自然堆積によって埋没したことがうかがえる。最上層を第II-1層が覆い、その下層は中粒砂、細粒砂、緑灰色系の極細粒砂と続く。遺物や木材片などは全く確認できなかった。素掘りの貯水池状の遺構である。第II-1層の形成時より古いことは確かであり、中世に遡る可能性もある。



第8図 調査区平面・断面図

2. 中世の遺構

第Ⅲ層を中心に12～15世紀の遺物が出土し、この時期の遺構が検出されることが予想された。結果的には住居跡を示す柱穴などは発見できなかったが、井戸、耕作関係の落込みを確認することができた。

51-OW (第9図、図版10)

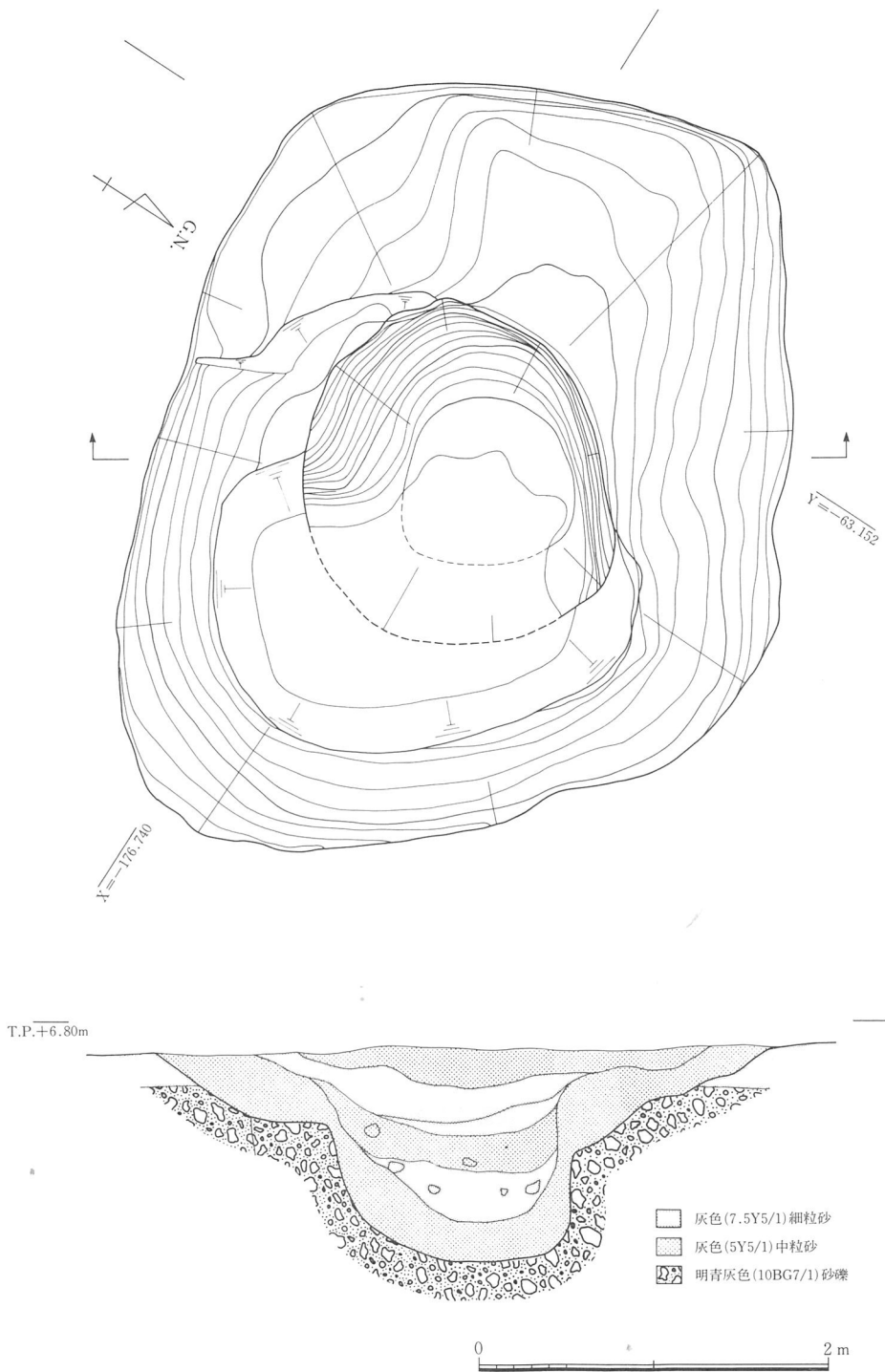
C区やや北寄りで検出された。2段掘りとなっている。外側の平面形はいびつな隅丸方形であり、その大きさは長軸4.4m、短軸3.5mである。内側の平面形はほぼ円形を呈し、径1.7～2.0mをはかる。深さは検出面から1.2mであり、砂礫の湧水層に完全に達している。人為的な埋め戻しの兆候はみられず、埋土は水成層の特徴を有する。自然堆積によって埋没したものと考えられる。最上層を第Ⅲ層が覆い、遺構は第Ⅳ層を切り込んで形成されている。埋土最下層は緑灰色中粒砂質シルトであり、このなかから13世紀頃の土師皿(第12図-21、図版15-21)が1点出土した。

52-OW (第8図、図版11上)

C区西隅で検出された。遺構は調査区外西方に延びている。隣家に接しており、擁壁を確保できなかったため、掘削を深さ1mで止めた。検出した平面形の規模は、東西方向で5mである。台風によって、壁が崩壊したため埋土の詳細な状況は不明であるが、上層を第Ⅲ層が覆い、その下層は緑灰色系の極細粒砂で水成層の特徴がみられた。遺物は全く見られなかった。円弧から判断するとかなり大きな規模のものと考えられる。

56-OX (第8図、図版8上)

B区中央で、調査区の短軸に平行してほぼ直線に検出された落込みである。検出した長さは18mである。標高6.90mから6.70mにかけて、約20cm下がっている。この落ちの上下を覆うのは第Ⅲ層であり、この層の形成以前に粘土質の地山を掘削したことがわかる。この上層には第Ⅱ・Ⅰ層がこの落ち込みの影響をうけて形成されている。畦畔など耕作関連の区画を示すもので、後の時代まで踏襲されたものだろう。また、C区にみられる不定形な溝状の遺構は、この時の耕作時に形成されたものであり、第Ⅲ層を埋土とする。



第9图 51-OW平面·断面图

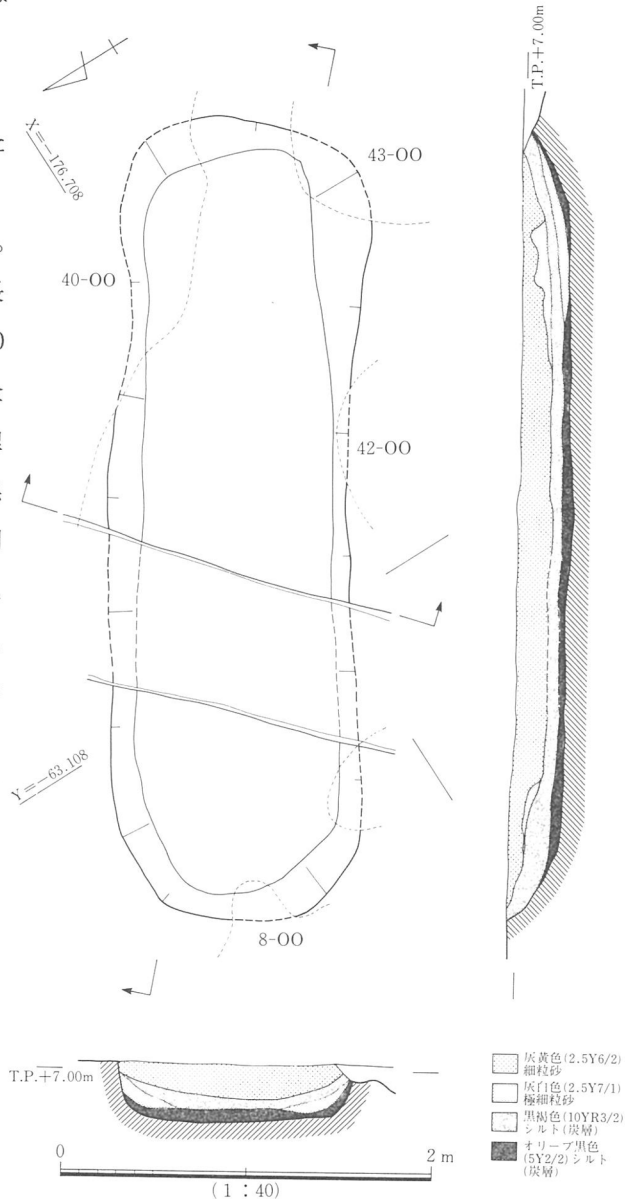
3. 中世以前の遺構

調査地で発見された中世以前の遺物には、古墳時代の須恵器、弥生土器、扁平片刃石斧、石鏃などの石器遺物があった。このうち、須恵器、扁平片刃石斧、石器遺物は中世以降の遺物とともに出土した遊離資料である。中世以前の遺物のみが出土した遺構で中世よりさかのぼる可能性のある遺構には土坑、河川がある。

41-00 (第10図、図版6)

A区中央西寄りで見出された土坑で、40-00、42-00、43-00によって切られている。平面形は隅丸長方形を呈し、長さ4.25m、幅1.30m、深さ0.30mをはかる。底面は平坦で、全面に火を受け赤変していた。埋土は最下層が炭を多量に含む黒色シルト、灰白色極細粒砂を間にはさんで、炭を含んだ黒褐色シルト、そして最上層が灰黄色細砂質シルトである。遺構全体を薄く、第III層が覆っている。最上層からはサヌカイト製石鏃(第14図-33)、石核(第15図-51)が出土した。遺構周辺に石器遺物が散在しており、混入の可能性もある。

上下の炭層に別の土層をはさんでいる点から、この遺構での燃焼行為は大きく二回に分けられる。遺構の性格については不明である。



第10図 41-00平面・断面図

53-O R (第8図、図版8下・9)

B・C区にまたがって検出された。幅20m前後、深さは最も深い調査区南隅で0.8mであるが、ほかは0.4m前後とほぼ一定している。河底の高さは標高6.0m前後ではほぼ平坦である。二股に分かれていた流路が合流する形になっている。河岸はえぐられて、オーバーハングしているところもある。この流路の走行方位は周辺の地形から考えれば、南から北であろう。埋土の状況は上層が褐灰色系の砂質シルトで、中層が黄褐色系の細粒砂、下層が黄灰色極細粒砂、最下層は粗砂～砂礫である。また、この自然河川は第Ⅲ層によって完全に覆われている。

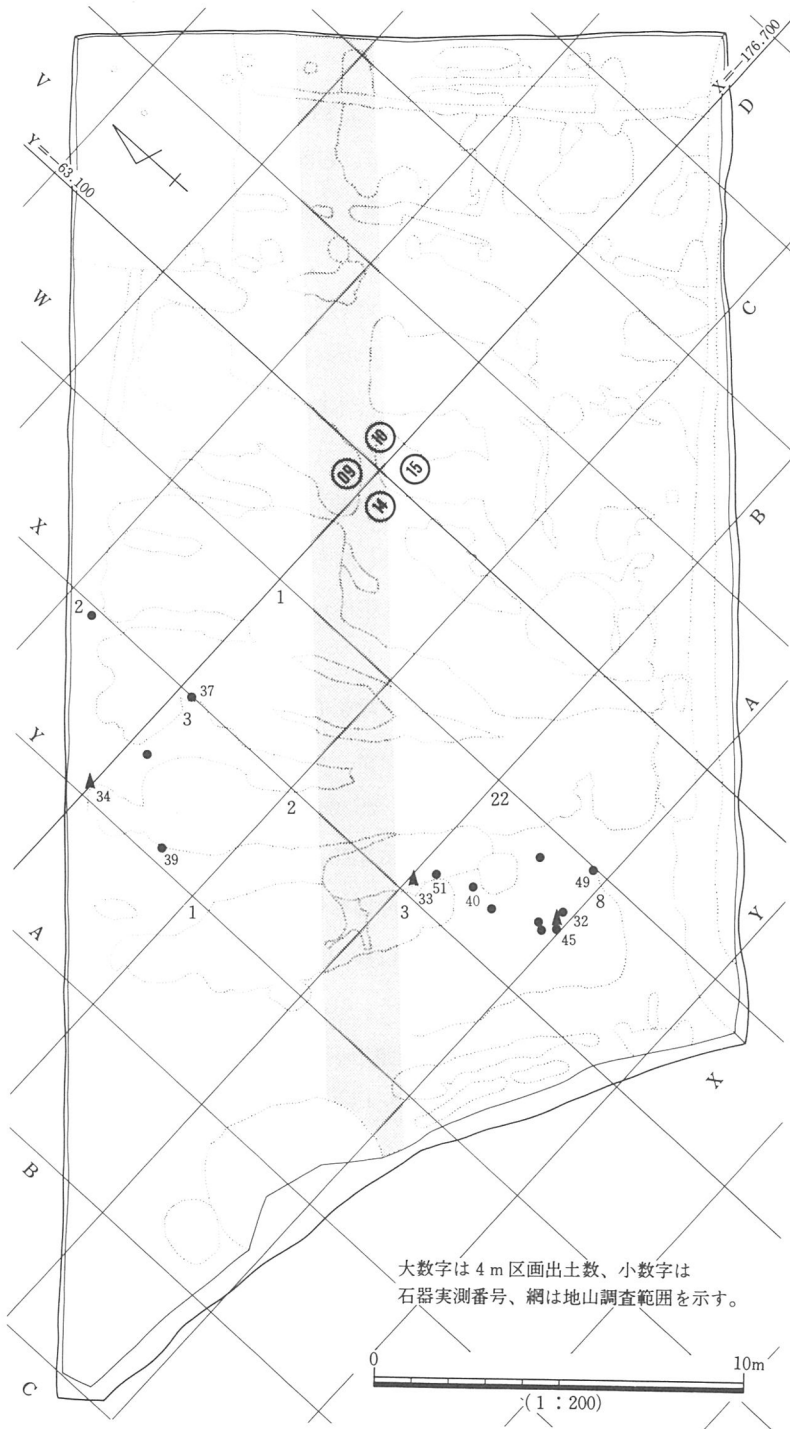
この最下層から弥生時代中期に属すると思われる壺形土器の底部破片が3個体出土した(第13図-28~30)。弥生土器のほかには流木がみられる程度で、新しい時期の遺物は確認できなかった。弥生時代に機能していた可能性も考えられる。

54・55-O R (第8図、図版11下)

C区を広く覆う細砂層(第Ⅴ層)は、ある時期にこの区全体が水の侵食作用によって下刻され、その後に徐々に堆積したものと考えられる。このうち、当時の台地を浅い流路状に下刻したものが54・55-O Rである。この細砂層は水成層で、全く遺物を包含していなかった。

石器遺物の分布(第11図)

今回の調査では75点の石器遺物が出土している。その内訳は石鏃5、石錐1、刃器1、石核5、二次加工のある剥片11、剥片22、チップ30である。その形態、製作技法の特徴から縄文時代の石器遺物であると思われる。このうち、主要なものの特徴は後に記載する通りである。これらはいずれも第Ⅰ～Ⅲ層から出土した遊離資料であるため、厳密な分布について触れることはできないが、その大方の傾向を指摘しておきたいと思う。さきの75点のうち、A区から出土したのは50点にのぼる。これはA区の遺構が集中しており、他の区と異なって小さな道具で掘削を行った結果、捕集される量が多くなったことによる。これに対し、A区内では同一人物がほぼ同じ方法で掘削にあたったので、この分布はある程度の石器破棄時の状況を反映しているものと思われる。第11図に示すように4m区画のなかで最も多くの石器遺物を出土したのは14C X区である。隣の14D Xからのものと合わせると30点が出土し、A区出土量の6割にのぼっている。この状況が偶然の一致であるのかどうかは不明であるが、石器遺物を多く包含した第Ⅲ層があまり移動していないものならば、当時この周辺において石器製作を含む活動が行われた証左となるだろう。



第11図 A区石器遺物出土の分布

第3節 遺物（第12～15図、図版14～16）

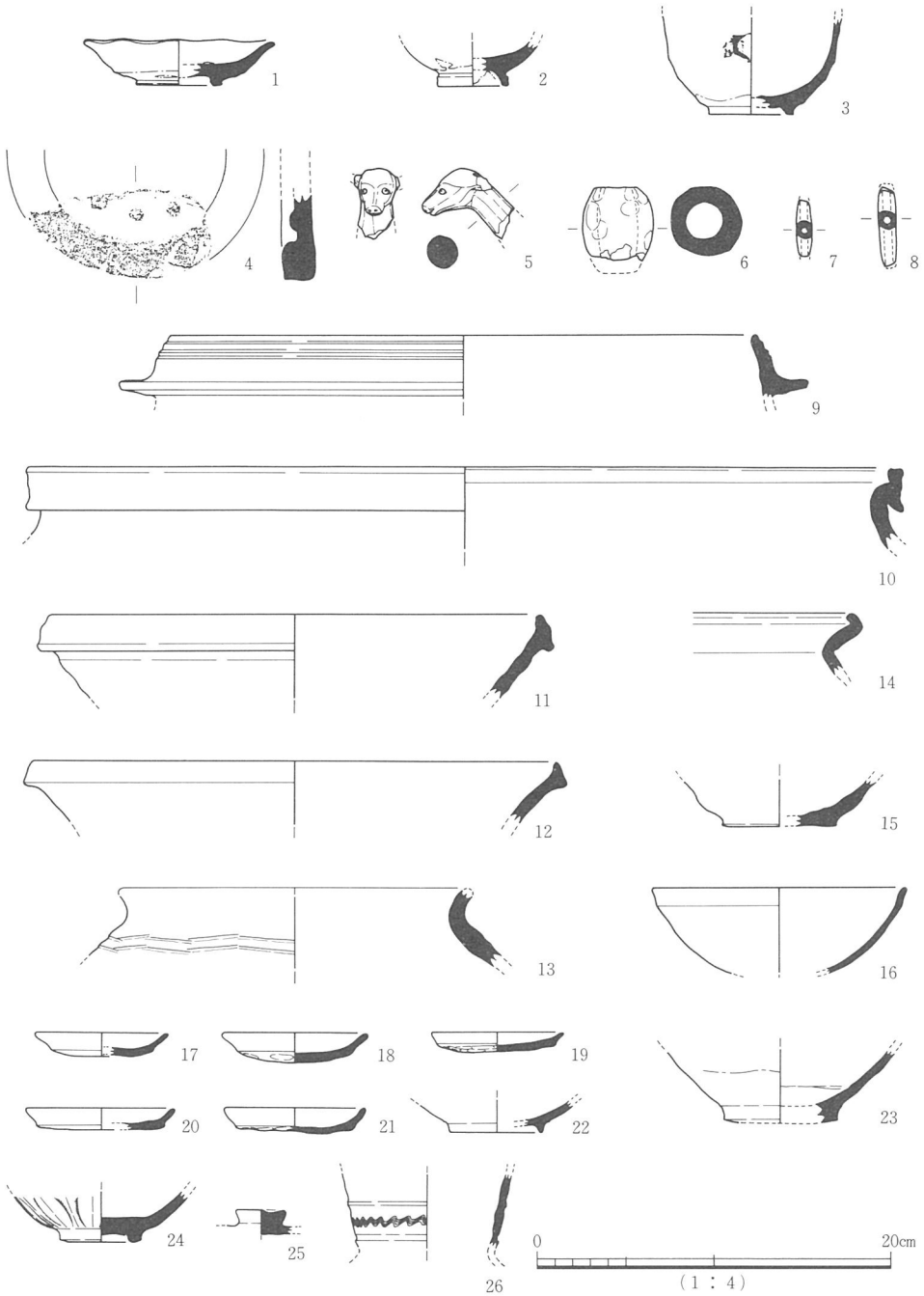
今回の調査区で出土した遺物には、磁器、鹿形土製品、土錘、蛸壺、瓦、瓦器碗、瓦質羽釜、土師器、須恵器、弥生土器、扁平片刃石斧、石器である。これらの多くは包含層中から混在して出土している。以下、時代別に分類して記載することにする。

1. 近世以降の遺物（第12図－1～8）

1～3は唐津窯系の磁器である。1は輪花皿である。復原口径10.8cm、器高2.6cmをはかる。内面中央に砂目を残す。2は天目茶碗で、復原底径4.0cmをはかる。3は碗であり、外面に模様の一部がみえるが、何を描いたのかは不明である。高台径4.8cmをはかる。いずれも16世紀末から17世紀初めの時期のものであろう。4は巴文軒丸瓦で珠文を残す。推定径14.6cm、厚さは1.8cmと薄手である。5は土製品で、頭に角を刺すためのものと思われる2つの孔がある。硬い焼きであり、鹿を模したものだだろう。6～8は土師質の土錘である。6は腹径4.0cm、復原長4.8cm、7・8は腹径1.0cm、復原長4.8cmをはかる。

2. 中世の遺物（第12図－9～23）

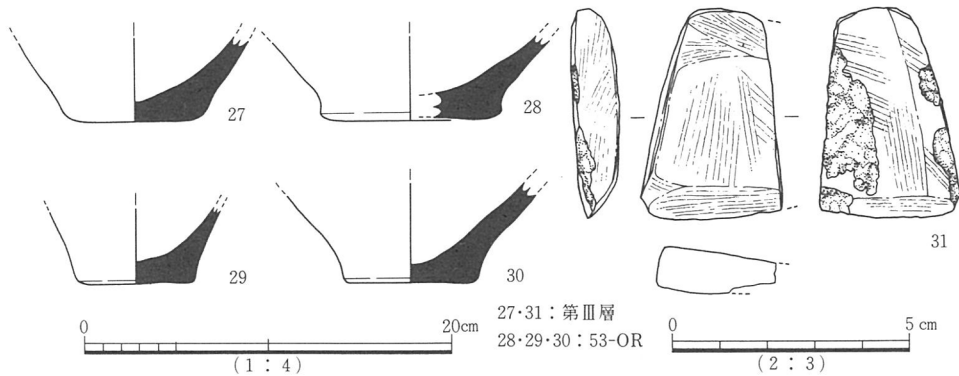
9は瓦質羽釜である。やや内傾する段状の口縁をもつ。復原口径32.8cmである。10は東播系の須恵器甕である。復原口径49.4cmをはかる。15世紀頃のものだろう。11・12は東播系の片口鉢である。それぞれの口径は29.0cm、29.2cmである。口縁部が肥厚し、14～15世紀の特徴をもつ。13は瓦質の甕である。復原口径20.0cm、短い口縁部をもち、体部表面にはタタキの痕がみられる。14は土師器甕で口縁部を折り返すものである。羽釜かも知れない。色調は褐色を呈し、結晶片岩を含む。15は鉢の底部で糸切りを行っている。東播系の製品であり、12～13世紀の時期のものであろう。16は瓦器碗で復原口径14.2cmである。内面の調整は磨滅のため不明である。外面は指頭圧痕が顕著である。器形から13世紀頃のものと考えられる。17は瓦器皿である。遺存している範囲では内面はナデのみで、口頸部内面にはヘラミガキを施す。復原口径8.2cmをはかる。18は灰白色で土師質であるが、内面にミガキの痕跡があり、もともと瓦器であり、燻しの不十分なものと考えられる。19～21は土師器皿である。いずれも指頭圧痕の顕著な平底で口縁部が短く立ち上がる。胎土の色調がそれぞれ異なり、19は浅黄橙色、20が明黄褐色、21が赤橙色である。13～14世紀のものだろう。22は瓦器碗の高台部である。復原高台径5.2cmをはかる。23は中国製白磁碗である。恐らく平底であり、復原底径は6.4cmをはかる。体部外面下方には施釉が行われていない。24は青磁龍泉窯系蓮弁文碗である。底径4.5cmをはかる。



1・2・4・5・8・10：現代耕土，11・15・24：第Ⅰ層，3・7・9・12・16・25・26：第Ⅱ層

13・14・17・18・19・20・22・23：第Ⅲ層，6：5-OS，21：51-OW

第12図 出土遺物（その1）



第13図 出土遺物（その2）

3. 古代・古墳時代の遺物（第12図-25・26）

25は蓋のつまみである。径2.9cmをはかる。26は頸部に波状文のあるもので、古墳時代の長頸壺であろう。

4. 弥生時代の遺物（第13図）

27~30は弥生土器の底部である。27は底径7.6cm、残存高4.5cmをはかる。調整は磨滅のため不明である。器種は壺であろう。28は復原底径9.8cm、残存高4.5cmをはかる。胴の張った壺になるのであろう。胎土中には2~7mm大の砂粒を多く含む。内外面とも磨滅が著しく、調整は不明である。29は底径6.4cm、残存高4.1cmをはかる。胎土中に2~4mmの砂粒を比較的多く含む。調整は内外面とも磨滅のため不明である。器種は甕か鉢であろう。30は復原底径7.2cm、残存高5.4cmをはかる。色調はチョコレート色であり、胎土中には角閃石を含む。いわゆる生駒西麓産の胎土の特徴をもっている。調整は不明である。これらの土器は器形から弥生時代中期に属するものだろう。31は磨製扁平片刃石斧である。材質は不明であるが、黒色の緻密な石材を使用している。側縁を縦方向に欠損しているため全体の形状は不明だが、台形もしくは長方形になると思われる。基部と刃部とは平行になっていない。裏面には敲打痕が認められる。

5. 石器遺物（第14・15図、図版16）

出土した石器類には、石鏃、石錐、刃器、二次加工のある剥片、剥片、及び石核がある。いずれもサヌカイト製で、剥片を除いた全てを図化した。図化にあたり、主要剥離面の残存する場合は基本的にその面を右に配した。また、新しい欠損部は網掛けで示した。1個体につき左図をA面、右図をB面と呼称する。

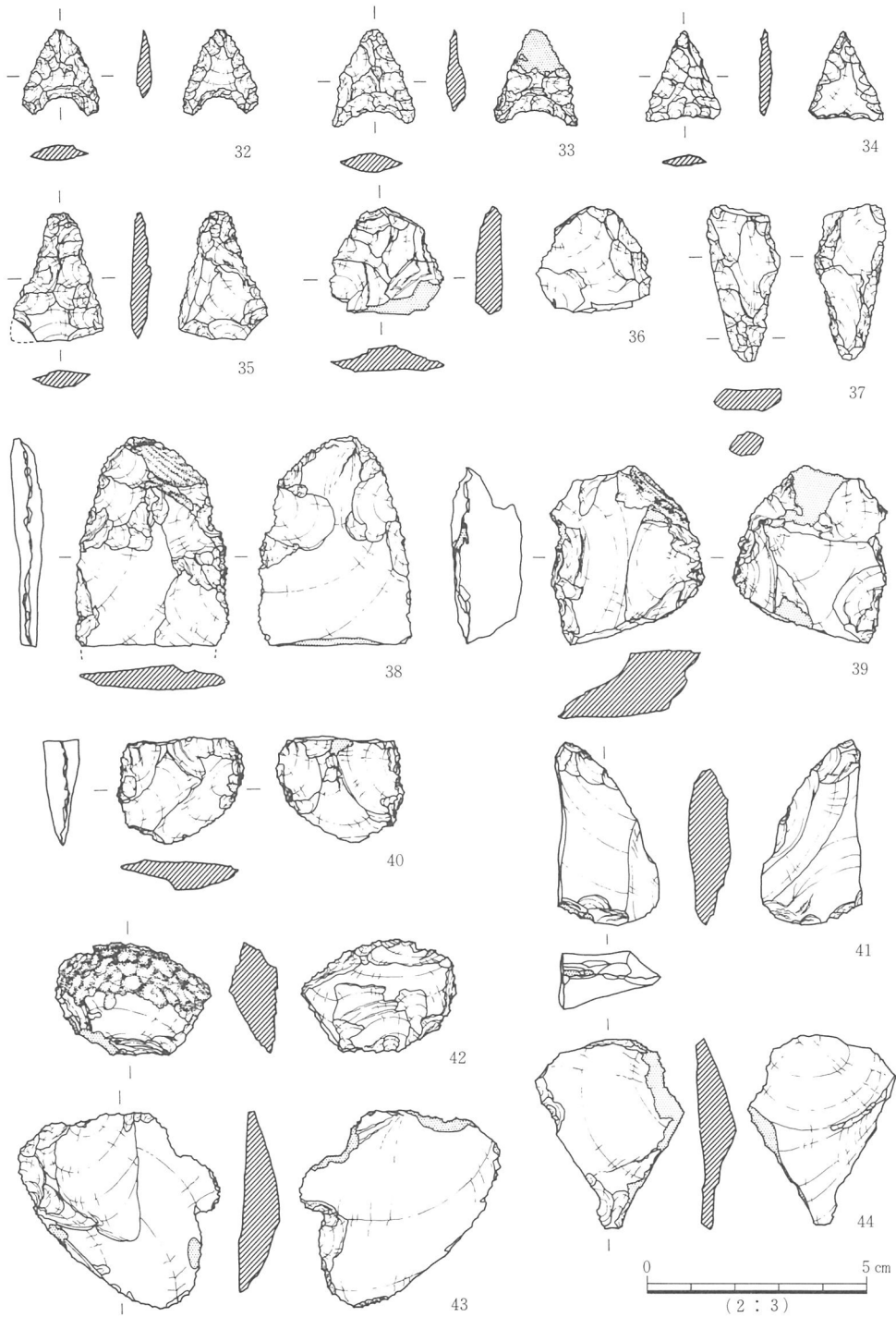
32~36は石鏃である。凹基式（32・33）、平基式（34~36）がある。32は腹面中央部に

主要剥離面を残している。腹面、背面共に刃部作出のための調整剥離を加えている。33は先端部を欠損した個体で、刃部調整を丁寧に施している。34は素材剥片の主要剥離面をよく残しており、全体的に丁寧な調整剥離を行っている。35は調整剥離面が全面に及び、主要剥離面を残していない。基部の一部を欠損している。B面左側縁では素材剥片を折り取って形態を整えている。刃部調整は、A面ではほぼ全面に行っているが、B面では先端部に調整を加えるのみで、全体的にみて調整は粗雑である。36は調整が極めて粗く、石鏃の未製品と考えられる個体である。主要剥離面をよく残し、腹面、背面共に形態を整えるための粗い調整剥離を加えている。背面側では鑄の稜線を確認できる。基部は折り取り未調整である。

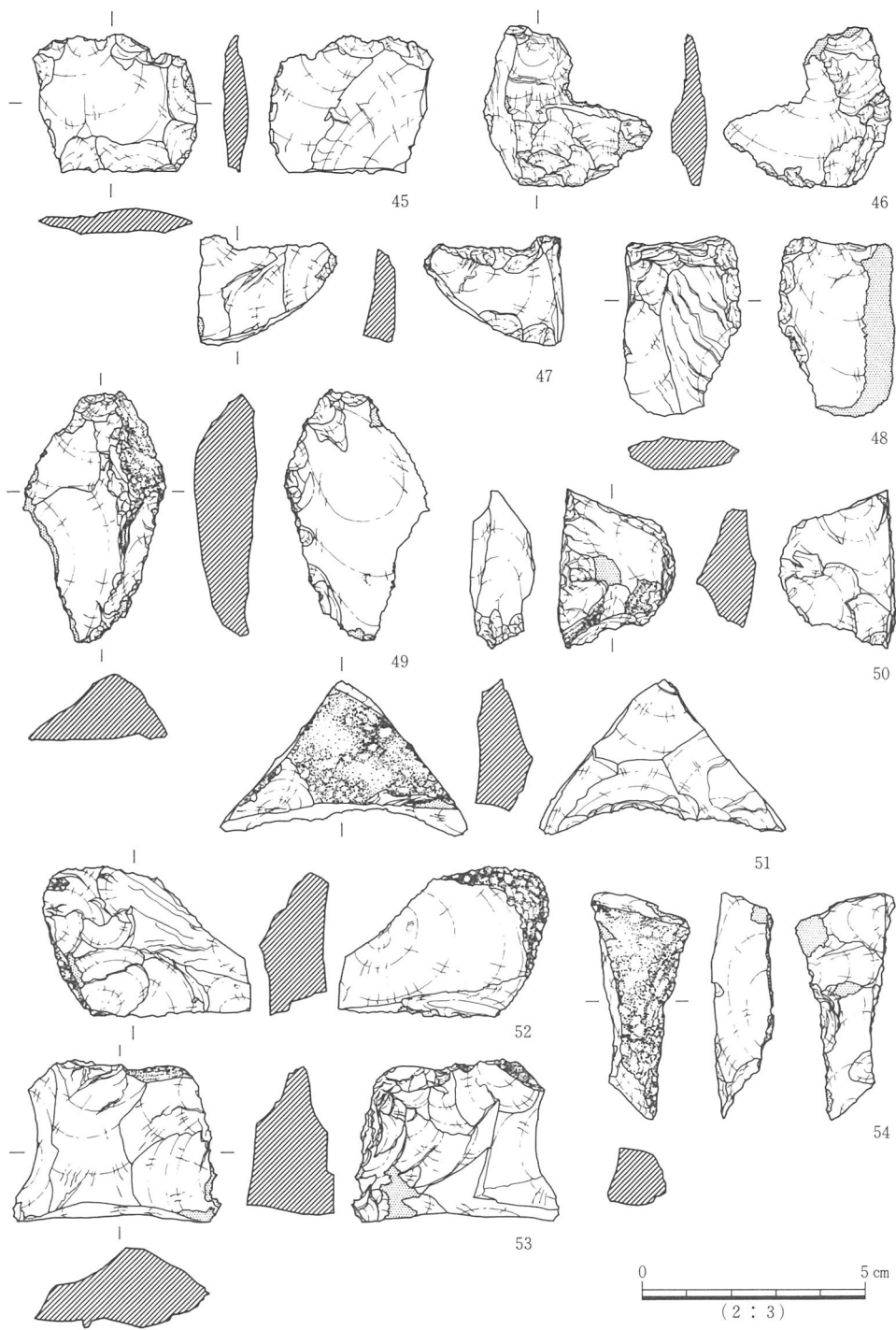
37は石錐である。調整剥離が全面に及び、主要剥離面を残さない。特に把持部のための工作はなされておらず、全体的にみて逆三角形を呈している。錐作用部は尖鋭ではない。

38は刃器である。打点付近の背面に原礫面を残している。薄い縦型の剥片を素材としている。打点を頂部としてその両側、すなわち剥片の辺縁部に、刃部作出のための調整剥離を施す。調整剥離は全体的に粗く、素材剥片の末端にはほとんど及んでいない。特に腹面の調整は粗い。素材剥片の末端部を欠損する。

39～49は二次加工のある剥片である。これは剥片のうちで主要剥離面に、剥片作出後の剥離面が存在するが石器と断定できないもの、すなわち剥片作出後に加工の施された可能性のある個体で、最終目的物の形状が推定しにくいものを一括して呼称している。39は調整剥離が全面に及んでおり、主要剥離面を残していない。側面には原礫面を残している。素材剥片の形状は不明であるが、かなりの厚みをもっていたと考えられ、厚みを減じるための打撃調整が、A・B両面に加えられており、粗雑な剥離面が観察される。A面では薄く加工された辺縁部に、細かい調整剥離が連続的に施されているため、あるいは刃部を意図した工作かもしれない。40は打点周囲が破折した剥片である。主要剥離面、背面共に剥片作出後に形成された剥離面が存在する。剥片の対向する両側縁には階段状剥離が認められ、楔形石器の蓋然性が高いと考えられる。41は主要剥離面を残さず、剥片自体が破折しているため、素材剥片の形状は不明である。A・B面共に粗い剥離面が形成されている。剥片の対向する両側縁には階段状剥離が認められ、その周囲に微細な剥離面が形成されている。楔形石器の蓋然性が高い。42は背面の一部に原礫面を残す横型剥片である。打瘤は調整剥離によって取り除かれている。剥片腹面の末端部には浅い角度で調整剥離が加えられているが、背面はほとんど加工されていない。43・44は、つまみ状の加工を施しており、



第14図 出土遺物（その3）



第15図 出土遺物（その4）

いわゆる石匙の未製品と考えられる。43は主要剥離面にリングのよく発達した縦型剥片を素材としている。把持部の調整は、腹面側の辺縁に行っている。素材剥片を作出した後、打点付近の背面側を中心として、恐らく厚みを減じるための粗い調整剥離を加えている。刃部の位置は素材剥片の末端部にあると想定されるが、刃部作出のための調整剥離は背面に僅かに観察されるのみである。44は43と同様、主要剥離面にリングのよく発達した縦型剥片を用いており、素材剥片の形状も類似している。把持部の調整は、欠損のために確実とはいえないが、背面側の末端に施していると考えられる。その他の剥離調整は、右側辺縁部に背面側から僅かに行うのみである。腹面には全く調整が加えられていない。45は剥片の末端部を折損しているが、本来は縦型剥片であったと考えられる。主要剥離面には1枚の大剥離面が存在する。背面には石核稜以外は認められず、調整剥離は加えられていない。46は不定形な剥片で、主要剥離面辺縁、及び背面の一部に剥片作出後の調整剥離が認められる。フィッシャーがよく発達している。47は縦型剥片である。打点は背面の剥離によって欠損し、剥片辺縁部の片側と末端部は破損により存在しない。主要剥離面の辺縁部には数枚の調整剥離面がみられる。48は縦型剥片である。打点付近の辺縁では腹面、背面共に部分的に調整剥離が存在する。背面の大半は石核稜を残すが、打点付近に細かい階段状剥離が認められる。49は側面に原礫面が残存した縦長の剥片である。A・B両面に主要剥離面が存在するが、A面には打点が存在せず、B面に先行する剥離である。B面の打点付近に複数の細かい剥離面、及びA面の一部に剥離面が存在するが、意図的な調整ではないようである。

50～54は石核である。50は剥片を素材とした石核と考えられる。背面側の一部には原礫面を残している。A・B面共に粗い打撃調整を加えている。51は背面に平坦な原礫面を残す、剥片を素材とした石核である。恐らく板状になると思われる素材剥片に垂直方向に打撃を与え、三方の辺縁を折り取っている。その後、腹面側に加撃して剥片を作出している。52は側面に原礫の隅角部を残す、剥片を素材とした石核と考えられる。礫面の形状より、亜角礫を素材として使用していることがわかる。素材の周辺に多方向から打撃を加えて比較的大きな剥片を作出している。53は原礫周辺に多方向から打撃を加えて剥片を作出した石核で、側面の一部に原礫面を残している。A・B両面から交互剥離が行われ、厚みを減じているが、剥離方法に規則性は認められない。最終的に下半部を折り取っている。54は背面に原礫の隅角部を残す、剥片を素材とした石核である。素材の腹面を加撃して剥片を作出した後に、背面から素材に打撃を加えて剥片を折り取った残核である。

第Ⅳ章 まとめ

今回の調査は中開遺跡の本格的な発掘調査として初めて実施されたものである。今回の調査の成果を古い時代から順に概観することにする。まずはじめに、A区を中心として縄文時代の時期と思われる石器遺物が多数出土したことがあげられる。残念ながらこれらは原位置を保って出土したものではないが、出土遺物の中には石鏃、石錐、スクレイパーなどの製品のほかに、石核、剥片、チップが含まれている。このことは出土地点から遠くない場所において石器製作作業が行われたことを示すものと考えられる。

次に弥生時代の遺物では弥生土器、扁平片刃石斧が出土した。このうち前者は自然河川から、後者は包含層中から出土した。いずれも原位置を保つものではないが、この周辺に集落の存在を示唆するものであろう。弥生土器のうちの一つは明らかに生駒西麓産の胎土をもつもので弥生時代の地域間交流の資料を提供している。また、自然河川については弥生時代より後の遺物がみられなかったことから、この時代に機能していた可能性を指摘することができる。

古墳時代から中世までについては少量ながら遺物が出土しているが、その実態については不明である。中世については、試掘調査でその存在が予想されたところであった。当初、建物遺構などが検出されるものと思われたが、包含層のほかに井戸と井戸状の遺構が検出されるに留まった。このことと土層の特徴から判断すると、今回の調査区の範囲はおもに耕地として利用されていたものと思われる。近世以降については16～17世紀の唐津窯系の磁器が包含層から出土している。また、遺構ではこの時期の可能性のある井戸が一基発見されている。資料が少ないため、その実態については不明であるが恐らくこの時期にも近隣に集落を営み、この地は引き続き耕地として利用されていたのであろう。

今回の調査では可能性の段階に留まっているものも少なくないが、この地域の歴史を考える上でいくつかの重要な発見があった。中開遺跡の調査はまだ緒についたばかりであり、今後、周辺の調査に期待されるところである。

